

この度は、奈良県警の方には大変お世話になり、本当に申し訳なく思っています。

今は、生きている実感をひしひしと感じているとともに、遭難当時のこともそうですが、救助された時の喜びが忘れられません。県警のヘリコプターが来てくれた時は、「本当に神様が来たのか」と思うくらいに嬉しかったです。遭難当時は、不思議なことに、空腹感も喉の渇きもさほど感じませんでした。それより、日が落ちてからの寒さをいかに凌ぐかをいつも考えていました。助けて頂くまで、毎日「朝、目が覚めないのではないか。」「このまま死んでいくのか。」との絶望感に襲われていたのです。

2日間は山中を彷徨いましたが、昔、友人から「山で遭難すれば、沢に行け。沢には水があるから一週間は生き延びられる。」と教えられたことを思い出したので、3日目からは沢で一夜を過ごし、昼間は沢を下る日々でした。それに、山中では「もし、ヘリコプターが来てくれても見つけることはできない。」とも思いましたので、発見される前の3日間は、視界が開けた沢の大きな岩の陰に落ち葉を敷き詰め、寒さを凌いでいました。そして、私が遭難して8日目のお昼前、遠くからヘリコプターのエンジン音が聞こえてきたのです。私は「もしかして、自分を助けに来てくれたのでは」と思い、倒れそうになるのも忘れ、近づいてくれることを祈りました。すると、次第にエンジン音が大きく聞こえ、ついに大きな機体が私の上空に現れたのです。私は、持てる全ての力を使い、ヘリコプターに向かって両手を大きく振り「助けてくれ!」と大声を出しました。

ヘリコプターから「こちらは奈良県警です。さん(遭難者の名前)ですか?」と尋ねてこられ私は、「ついに助かる時が来たんだ。」と感激で胸がいっぱいになりました。

その後、県警ヘリと連絡をとっていた吉野警察署の方と地元山岳救助隊の方々が来て、おにぎりや飲み物等を差し出してくれましたが、絶食状態が続いていたことから食べるに食べられない状況でしたので、食べずに申し訳なかったです。

しばらくして、和歌山から来た防災ヘリに病院へ運んで頂いたのですが、その間、私は「生きているんだ。本当に生きているんだ。」と思わず涙が頬を伝い、生きている実感を得たのです。遭難中は「死への恐怖」がつきまとい、あと1日山にいたら、おそらく死んでいたことは間違いないと思います。

私は滝が好きで、全国各地の滝を見に行きましたが、今回のことで、暫くは山に行くことを控えたいと思います。

また、単独で山に入ることは絶対にしません。

一度は死んだ身です。

一人だけでは生きていけないことも、今回のことでよく解りました。

誰よりも命を大切に、今後、生活をしていきたいと考えています。